

「大審問官」と「原爆文学」

——核時代における権力表象と対抗表象に関するノート——

柳瀬善治

はじめに

本稿では、前稿⁽¹⁾に引き続き、私のこれまでの原爆文学研究の論考を踏まえ、権力表象、戦争表象への新たな分析の可能性を探る。

本稿で問題とするのはドストエフスキーの「大審問官」を靈感源とした戦後文学での諸言説であり、それらが提出する諸問題をいかに原爆文学研究へと架橋しうるかについて考える。

原発事故から十年余りが過ぎ、三年目を迎えようとするコロナウイルス禍、安倍元総理の暗殺⁽²⁾、さらにはロシア—ウクライナ戦争⁽³⁾の勃発から核戦争の可能性すらささやかかれてくる現在⁽⁴⁾、権力表象、戦争表象への新たな考察がなされなければならない。本稿はそのためのささやかなノートである。

一 「権力の内面」・「大審問官」・「知的概観の世界像」

日本近代文学において、ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』のなかの「大審問官」の挿話は、様々な形で言及され、作家の創作の靈感源となつている⁽⁵⁾。「大審問官」の権力性は「大審問官的存在とは、群衆のなかにかくされた卑しさや屈辱を奇跡と神秘と権威によつて統御していくもの」という神山睦美の理解が妥当であろう⁽⁶⁾。

戦後文学においては、埴谷雄高が一連のドストエフスキー研究の中で「大審問官」に言及しており「大審問官」の作家を「極度の推論式の飛躍によつていわば想像力を超えた想像」に「到達した不可能性の作家」⁽⁷⁾と呼んだうえで、「麵麴、奇跡、権威」が「麵麴、電化、党という三位一体をもった革命のかたち」⁽⁸⁾となるのが現代であり、そうした読み替えが可能などころに「大審問官」のアクチュアリテイを見ている。また、埴谷は戦後文学へのドストエフスキーの

影響を野間宏、椎名麟三、武田泰淳の三名に見ており、泰淳の『風媒花』(1952)での「無関係な殺人」——「ある種のボタンを押して、そこから恐ろしい窮極兵器が飛び出し、一瞬のうちに大量な人間を殺戮してしまう場合」——に「ラスコーリニコフの思想を数歩踏み越えようとする強靱な努力」を読み取っている⁹⁾。武田が『第一のボタン』(1951)という「原爆文学」の著者でもあることはこの観点から見て重要だろう。

堀田善衛もいくつかの作品で「ドストエフスキー」をとりあげており、高橋誠一郎は堀田が1963年に行われたアンケートで「現代のあらゆるものは、萌芽としてドストエフスキーにある。たとえば、原子爆弾は現代の大審問官かもしれない¹⁰⁾」と回答したことを踏まえ、同年に刊行された『審判』をドストエフスキーとの比較で分析し¹¹⁾、さらに『ゴヤ』『路上の人』を同様の観点から解説している。

三島由紀夫も「大審問官」を重視した一人であるが、三島由紀夫は中村光夫との対話において「権力の内面」という興味深い観点を提出している。その話題の中で三島はドストエフスキー「大審問官」を引き合いに出している¹²⁾。

三島 (略) ——しかし、権力というもののパラドックスというか、ああいうものにはとても興味がある。スターリンの娘スベトラーナの手記が出ましたね。スターリンは百万人くらい殺しているにもかかわらず、自分の手で殺したことは一度もない。虫も殺さないようなやさ男で、ただサインするだけ。ああいう人間の内面というのは文学的にとっても面白いですね。林(房雄)さんは権力構造を描こうとするとどううまくゆかなかった¹³⁾。

三島 権力の内面の荒廃というか荒れはてたもの、それを本当に迫真に描いたものはない。僕は今度美濃部さんに小説を描いてもらおうと思つて楽しみにしている。

(略)

三島 でもさすがにドストエフスキーは知っているよ。「カラマゾフ」の有名なエピソード。

中村 大審問官。

三島 あれは権力の内部構造というものをほんとうに描いているのではないかな¹⁴⁾。

三島は『道義的革命的論理』などの著作でテロリズムの問題を扱っているが、こうした三島の問題意識は、文学は権力を担うものと抗するものの双方を表象しなければならないと三島が考えていたことをうかがわせる。

三島に類似した観点から「大審問官」に言及した批評家として、橋川文三があげられる。橋川文三は三島の二・二六事件三部作に触れつつ、次のように述べている。

二・二六における天皇と青年将校というテーマは、ほとんどドストエフスキーの天才に俟たなければ描き切れないだろうというのが、私の以前の独断であった。それは何よりも神学の問題であり、正統と異端という古くから魅力と恐怖にみだされた人間信仰の世界にかかわる問題だからである。端的にいえば、それは日本人の魂の世界における「大審問官」の問題に

他ならないと私は考えている。⁽¹⁵⁾

この指摘については杉田俊介が橋川文三論の中で追及しており、杉田は三島と橋川の著作を詳細に分析しながら、この主題を「我々の現代の在り方」を照らし出す「絶対矛盾の奇妙な存在」「現人神としての天皇の問題」であるとして、そこから「ドストエフスキーの父殺し」「皇帝暗殺」「神殺し」に対する情熱⁽¹⁶⁾の重要性を説いている。さらに杉田は「晩年の五年間の三島の天皇論は、かえって、或る意味でポストヒューマンな問題圏において現人神の問題、日本的な神と維新の問題を考えるという可能性にかなり食い込んでいたのかもしれない」と述べたうえで、橋川が晩年に夢想した「現代日本の新たな革命」の可能性について考察している。さらに杉田は「ドストエフスキー・マルクス・ダーウイン」と題する論考においてこうした問い——杉田はこれを「**理不尽な絶滅**」にいかに抗するかであると呼ぶ——を現代で問い続けている論者として吉川浩満『理不尽な進化』、亀山郁夫『新カラマゾフの兄弟』、宮崎駿『漫画版風の谷のナウシカ』を挙げている。⁽¹⁷⁾

現代社会との観点から、「大審問官」を取り上げた論者として笠井潔がおり、笠井は『例外社会』のなかで、ドストエフスキーの「大審問官」を、「ドウルーズの管理社会論やフーコーの生権力論との照応が無視できない」「二一世紀的に読み直すことが可能ではないだろうか」⁽¹⁸⁾として、21世紀の権力を予期するものとしてのドストエフスキーの読み直しを提起している。

これらの論点に対し、本稿ではもう一つの論点を付け加えたい。それは私が原爆文学研究と三島との関連で度々問題としてきた「知

的概観的世界像」の問題である。すなわち堀田の示唆した「原子爆弾は現代の大審問官かもしれない」という問いは、三島にも該当するのではないかとということである。⁽¹⁹⁾

「例のピキニの実験における補償問題でも感じたことであるが、その実験を非人間的といひ、反人道的といふときに、われわれの人間なる概念は、すでに動揺をきたしてゐる。私は政治的偏見なしにいふのであるが、水爆の実験をした国の人間が、被害国の人間に保証を提供するといふこの行為には、国際間の問題とか、人種的偏見の問題とかを超えて、人間の或る機能が、人間の別の機能に対して、慈悲を垂れてゐるといふ感を与へる。」たとへばわれわれは、水爆を企画する精神と無縁ではない。われわれが文明の利便として電気洗濯機を利用することと、水爆を設計した精神とは無縁ではない。「現代の人間概念には、おそるべきアンバランスが起こつてゐる。広島原爆の被災者におけるよりも、あの原爆を投下した人間に、かうしたアンバランスはもつと強烈に意識されたはずであつた。被災者は火と閃光と死を見た。それを知的に概観的に理解する暇はなかつた。(略)しかし原爆投下者はどうだったか?(略)おそろしくいくばくの技術と科学知識にめぐまれてゐた投下者は、巨大ならざる自分の感受性を、あの知的な外観的な世界像の下に押しつぶすことを知つてゐたのである。そしてかういふ小さな隠蔽、小さな抑圧が、十分のあの酸鼻な結果をもたらすに足りた。ところがかうした投下者の意識は、今日われわれの生活のどの片隅にも侵入してゐて、それが気づかれないのは、

習慣になつたからにすぎないのである。あるひは小さな政治問題にひそむ世界的な連関に触れたり、国際連合を論じ世界国家を夢想したりするときのみならず、ほんの日常の判断を下すときにも、知的な外観的な世界像と、人間の肉体的制約とのアンバランスに直面して、一瞬、目をつぶつて、「小さな隠蔽」、「小さな抑圧」を犯すことに慣れてしまつた。「かくて例の水爆実験の補償は、私の脳裏で不思議な図式を以て、浮かんて来ざるを得ない。いづれも人間の領域でありながら、一方には、水爆、宇宙旅行、国際連合を含めた知的概観の世界像があり、一方には肉体的制約に包まれた人間の、白血球の減少があり、日常生活の生活問題があり、家族があり、労働があるのだ。この二つのものをつなぐ橋が経済学だけで解決されやうとは思はれぬ。この二つのものは、現代に住む人間の条件であり、アメリカの富豪にあつても、焼津の漁夫にあつても、程度の差こそあれ、免れがたい同一の条件なのである。⁽³⁰⁾

この世界観を前提として書かれた作品が『鍵のかかる部屋』である。ただ、世界が寸断されてゐた。それを縫い合わせやうとする不気味な、科学的な、冷静な手がどこかに見えた。彼はその手を恐れた。

一雄の世界は瓦解し、意味は四散してゐた。肉だけが残つた。この意味のない分泌物を含んだ肉だけが。それはみごとに管理

されて、完全に運営され、遅滞なく動いてゐた。医者の方つた
とほりだつた。百パーセントの健康⁽³¹⁾。

こうした「科学的な、冷静な手」によつて「完全に運営され、遅滞なく動いてゐる」意味のない分泌物を含んだ肉」。それが三島の言う「人間概念の分裂状態」である。この記述は、データベース型の「環境管理型権力」（東浩紀）⁽³²⁾あるいは伊藤計劃の描く「生府社会」（『ハーモニー』）の正確な予言となつてゐる。⁽³³⁾これは笠井が示唆した21世紀型の権力装置そのものであり、『鍵のかかる部屋』の世界観が三島の言う核時代に人間の知性と精神が被る影響を念頭においていることから三島の提出した主題はアクチュアルなものであるといえる。

杉田も三島と橋川の著作を検証する際の問題意識として「今や日本政府は金融的かつ縁故的な資本主義の下、国民国家の内実すらも他国籍資本に売り渡し、公然と1%と99%の格差と分裂を邁進させている」という現状認識（そして今の日本の保守陣営にかつての三島のようなイデオログすらいない）から出発している⁽³⁴⁾。戦後派作家を魅惑した「大審問官」の挿話は、杉田や笠井の所論からも明らかなように、現代社会へも通じるアクチュアリテイを持つており、そこに堀田が示唆する「原子爆弾は現代の大審問官かもしれない」という問い、さらには、三島の「知的概観的世界像」を重ね合わせてみたとき、そこには原爆文学、さらには3・2以後の原発表象への通路が開かれる。現在の「大審問官」は原子爆弾が与える「恐怖」と原発表が与える「電化（麵麴）」の両面を使い分け、現代版「パンとサーカス」を群衆に与えることで「群衆的な

かにかくされた卑しきや屈辱を奇跡と神秘と權威によつて統御」することが可能となる。

いつてみれば、三島の言う「権力の内面」Ⅱ「大審問官」の主題というのは、原爆投下に端を発した「知的概観の世界像」、投下者の視点と権力の問題、橋川の述べる「神学の問題であり、正統と異端という古くから魅力と恐怖にみだされた人間信仰の世界にかかわる問題」、そして笠井潔が示唆する21世紀型の権力を縫合する新たな「大審問官」の分析のための視座を内包しているのではないかということである。

二 三島と吉本の交錯点

——「世界視線」と「死者」——

ここで一つの補助線を引いておく。それは吉本隆明「世界視線」との関連性である。

すでに拙稿で指摘したように、吉本は80年代に『マス・イメージ論』の中で提出した「世界視線」の概念を「死の視線」との関連で問題化している。吉本は『マス・イメージ論』の「推理論」でポオを論じながら「渦巻の内壁を、鳥瞰する位置から見たり、渦の粟粒まで見えるほど接近した位置から視ている、もう一つの自在な眼」を指摘したうえで、それをドストエフスキー『罪と罰』と関連付けている。

宮沢賢治と親鸞についての講演では、よりはっきりと死への言及があり、「この通過点のこちら側には、現世の倫理があつて、向こう側には、他界の世界の倫理、主として仏教が作り上げた他界の

倫理があります」「親鸞がほんとうの死とかんがえた、その死からの言葉が、無意識のうちにしゃべり言葉のなかに入ってきて、それは現世的、人間的な善悪の基準とぶつかり合ったところが、相矛盾する言葉として出てきている」⁽²⁵⁾とする。

三浦雅士はこの点について「善悪の彼岸ともいうべき倫理的な中性点を通過するその場面が、他界からの視線、死の視線が放射される場面と一致している」⁽²⁶⁾と述べている。

そして、より興味深いのは、三浦の指摘にあるように、この二つの講演の直後に吉本が書いた柳田国男論では、柳田は「渦巻の内壁を、鳥瞰する位置から見たり、渦の粟粒まで見えるほど接近した位置から視ている、もう一つの自在な眼を所有した存在」として、つまりはポオと同様の視線を持った存在として位置付けられている⁽²⁷⁾。

さらにこの視線と同様の「死の視線の所有者」が『重層的な非決定性へ』では80年代のファッションデザイナーやコンピュータ・グラフィックスに見出されている⁽²⁸⁾。

この三浦の指摘を受けた上で、神山睦美は「はるか遠くから差し込む視線は、自己というものにまとわりついているものを次々に微分化することによって、おのずから死後と未生以前を往還することを可能にするということ」とまとめ、それが吉本の言う「世界視線」であるとしている⁽²⁹⁾。

神山は32頁以後に書かれた本の中でこの吉本の「世界視線」を「人工衛星ランドサットから撮影された映像やコンピュータ・グラフィックスについて言及しながら、そこに見出されるイメージ体験が、臨死体験におけるそれに酷似していることが述べられることも

に、そのようなイメージが、胎内体験のイメージ化に通ずるものであると述べられる。いつてみれば、ここで、死と生誕がひとつながりのイメージとしてとり出されているのであり、それは「無限の過去と無限の未来に向かつて内挿したり、外挿したりすることができる」ようになったイメージであるとされるのである」とまとめなおしている⁽³⁰⁾。

吉本は「世界視線」の例として人工衛星ランドサットの例を挙げているが、この人工衛星からの視線はまさに三島が問題化したものと同じである。

吉本の「世界視線」は、その後の『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』でコンピュータグラフィックやファッションのデザインとの対応がなされていることから、笠井のいう「アーキテクチャに隅々に至るまで管理された」社会への対応が認められるが、笠井が参照するフーコー・ドウルーズ流の「社会」は、人間を生きながら「肉」として「制御」するものであり、神山の言う「死後と未生以前を往還すること」を可能にする「視線を内包したのではない。むしろ笠井の議論に神山の吉本論を接続したほうが生産的だろう。「死との往還」の主題に、明らかに吉本は権力に抗する力を見出そうとしている。それはこの主題を扱う際に、柳田国男が念頭に置かれていることから明らかである。また、興味深いことには、吉本は柳田の方法意識と文体に〈空隙〉〈亀裂〉を見出している。

柳田国男じしんは外視鏡と内視鏡の像のあいだに浮かびあがる〈空隙〉と〈亀裂〉の意味を、人々に気づかせたかったとおもえる⁽³¹⁾。

吉本は彼のドウルーズ・ガタリ『アンチ・エディプス』批判を見てもドウルーズ・ガタリの戦略には批判的であり⁽³²⁾、この段階で『ミル・プラトー』は読んでいなかったと思われるが⁽³³⁾、〈空隙〉〈亀裂〉〈線〉〈差異〉など80年代の吉本の発想と概念にはむしろドウルーズ・ガタリに近似するものが随所に見受けられる。

（吉本はこの書評でドウルーズ・ガタリの批判をしながらも『アンチ・エディプス』にライプニッツの影響を見抜くところなど——ドウルーズのライプニッツ研究の存在⁽³⁴⁾を知らないであろうと思われるのに——随所に慧眼が見られる。）

ここで前稿での議論⁽³⁵⁾をもう一度復習しておけば、ドウルーズ・ガタリは『ミル・プラトー』のなかで「此性」には始まりも終わりもないし、起源も目的もない。（此性）は常に〈ただなか〉(au milieu)にあるのだ。（此性）は点ではなく、〈線〉のみで成り立つ。（此性）はリズムなのである」と論じている⁽³⁶⁾。ここでの〈線〉は、ドウルーズがマイケル・フリードのジャクソン・ポロック論⁽³⁷⁾を補助線として、「平滑空間」を描くための〈線〉として提出しているものである⁽³⁸⁾。つまり、「平滑空間」と〈此性〉と「リズム」は対応関係にある概念であり、「此性」は常に〈ただなか〉(au milieu)にある」という一節は中動態が主体を過程の中に置くものであるという理解と対応する。中動態は〈此性〉を表象する装置であり、かつ「平滑空間」を描くための〈線〉によって表象されなければならないのである⁽⁴⁰⁾。この〈線〉と比肩しうる〈空隙〉〈亀裂〉に基づく〈線〉を吉本もまた『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』当時に構想していた。

この権力に抗する死の観念に裏打ちされた〈空疎〉〈亀裂〉⁽⁴¹⁾、そこから〈差異〉を生み出す〈線〉という発想は、いわば三島の言う核時代の「大審問官」Ⅱ「知的概観の世界像」からの逃走線であり、吉本は同時代の反核運動には一貫して冷淡ながら⁽⁴²⁾、核時代の表象空間にいかにも亀裂を生じさせ、「逃走」のための《線》を引くかを考え続けていたのだといつてよい。

ただ、吉本の〈差異〉〈線〉に該当する概念が三島の作品中に見出せないわけではない。それは他ならぬ『鍵のかかる部屋』でのこのような表象である。

歌をうたふといふことは、何か内面的なものの凝固を妨げるのだらう。ある流露感だけに涵つて生きる。そんなら何も人間の形をしてゐる必要はないのだ。この非流動的な、ごつごつした、骨や肉や内臓から成り立つたぶざまな肉体といふもの。これが問題だ。さもなければ、彼は歌ふだらう。飛ぶだらう。どんな細い隙間でも、一種の流動体になつてすりぬけるだらう。現実の連鎖は解かれるだらう。⁽⁴³⁾

彼は自分を限りなく無力なかわいい玩具と考へることに熱中した。目をつぶって自分を一生懸命シガレット・ケースだと思はうとすれば、人間は実際或る瞬間には、シガレット・ケースになることだつてできる。⁽⁴⁴⁾

ここで提出されている流動性・変質性の表象は、ボーダーレスな身体観・世界観であり、いわば世界からの〈差異線〉Ⅱ〈逃走

線〉である。この主人公「雄」の発想は『鏡子の家』での清一郎の「ネオンサインになりたいと思つた」「ピールの滓になりたいと思つた」という生成変化（ドウルーズⅡガタリ）的な発想に対応している。⁽⁴⁵⁾『憂国』以降の男性性を強く押し出した作風とは異なり、1960年代の三島の作品には、こうしたボーダーレスな身体観・世界観が表象されているのである。

こうした世界観には、三島の原子爆弾と情報化社会についての透徹した認識が影響している。『小説家の休暇』に先立つこと2年、1953年9月に書かれた「死の分量」というエッセイで三島は次のように述べている。

われわれの原子爆弾に対する恐怖には、われわれの世界像の拡大と単一化が、あずかつて力あるのだ。原爆の国連管理がやかましくいはれているが、国連を生んだ思想は、同時に原子爆弾を生まずをえず、世界国家の理想と原爆に対する恐怖とは、互ひに力を貸しあつてゐるのである。交通機関の発達と、わづか二つの政治勢力の世界的な対立とは、われわれの抱く世界像を拡大すると同時に狭窄にする。原子爆弾の招来する死者の数は、われわれの時代の世界像に、皮肉なほどしつくりしてゐる。⁽⁴⁶⁾

これはまさに核時代・高度情報化社会の「大審問官」の表象であり、そこに死者の像の裏打ちがあるという点で、吉本の「世界観線」と共通の根を持つ。

三 橋川文三と中上健次

——「歴史」「物語」という「超越者」——

そして橋川にもやはり、死者と歴史への透徹した問いがある。⁽⁴⁷⁾

橋川は戦後の日本が持ちえなかつた「歴史意識形成の可能性」を「幕末の「開国」と「維新」の時期」にみている。橋川は「国民の土着的生活体系の中に含まれるエネルギー」が「国家」「団体」に集中され、「個体存在のユニークな意識は、なんらの役割もわり振られることなく無視された」⁽⁴⁸⁾ととらえている。そして「日本の精神伝統において、そのようなイエスの死の意味にあたるものを、太平洋戦争とその敗北の事実に求められないか」⁽⁴⁹⁾という提言を行う。

後年の橋川の、水戸学・ネーションの形成への着眼を典型とする幕末維新期への執拗なこだわりはこうした彼の歴史意識論＝責任論と深くかかわっている。ネーションの形成「以前」を論じた『ナショナルリズム』、「水戸学の源流と成立」⁽⁵⁰⁾などがそれだが、そうした文脈の中で、「殺戮しつくしてなおあきたらなかつたというほどに徹底した内争」いわば〈内戦〉を論じた著作がある。「水戸内乱」について触れた「天狗随想」⁽⁵¹⁾では「イデオロギー的側面」とは違う「思想以外の要因」を水戸の内乱の「殺戮のための殺戮」に認めようとしている⁽⁵²⁾。この論点は伊藤計劃以後の文脈で「世界内戦」(岡和田晃)⁽⁵³⁾の重要性が現代文学・思想の領域でクローズアップされている今、改めて顧みられる必要がある。

他にはまた、「神風連の乱」についてスピノザに言及しつつ日本の政治意識における「怒りの不在」を述べた橋川文三「失われた

怒り」⁽⁵⁴⁾などがあり、スピノザ的情動とのかかわりで橋川はこうした政治的テーマを論じているのである⁽⁵⁵⁾。

江藤との対話で、橋川は歴史意識を形成させる力として「普遍者の意識を作り出すことがどうしても必要である」としそれを「太平洋戦争」の戦争体験に求めている。これは「太平洋戦争」の膨大な死者をとおしてそれを普遍性にまで高めようとする意志の表れである。

杉田は前述した著書の中で橋川の『世紀の遺書』への言及⁽⁵⁶⁾を重視し、「日本民衆の根源に遡行しつつ、それを外へ外へと開かんとする意志」、日本が「アジアへと、世界史へと開かれていく」可能性を讀む⁽⁵⁷⁾。

橋川は彼の歴史意識論において、戦争(敗戦)体験を「抽象化」の手續きを通じて「超越者」として持つという歴史観、「歴史のうちに普遍者の意味を認めるという思考の衝動」⁽⁵⁸⁾の重要性を提唱する。後年の橋川の歴史論はこの主題をめぐって展開されるが、その徴候はすでに『日本浪漫派批判序説』に世代論として現れている。さらに橋川が実感信仰＝私小説に回収されない「抽象化」の必然性を「**たんなる実感では原水爆は阻止できない**」⁽⁵⁹⁾ことに求めている点に注目すべきである。

橋川は親族が広島島の被爆者であり、弟敏男を1945年に結核で失っている⁽⁶⁰⁾。橋川の個人史に加え、こうした被爆地広島固有の文脈も彼の理論に影を落としていることを考慮すべきであろう。彼の歴史意識の「抽象化」は原爆という「超越者」に抗するための思想的強度を求めするために選択されているのである。

三島、吉本、橋川の三者の思考に、戦争と死の影が絶えず落ち

ていること、そして科学技術と戦争、なにかなく、核の問題が彼らの思考の中心に位置しており、三者ともいかにして科学技術に媒介された現代社会の権力、その中に内包された死と生を受け止めたうえで、それに対抗するすべを模索していたのだといえよう。

そして、吉本の『マス・イメージ』論に先立つこと3年、橋川が存命中の1976年にここまで私が論じた権力表象と同様の視角から物語を論じていた作家がもう一人いる。それは中上健次である。

物語によってつくられた原爆が、人間に、科学が巨大な頭上から見おろす一種神のような存在となり、人間としての病いを患わせるように実存を問わせる物語をしたてあげているのである。その新たな物語の抑圧下にいるこの街に入ると、大阪や京都、いや吉野というむかしからある物語に満たされた町に馴れ、しかも物語に過敏な者には、重力が変化したような気がするのである。関東大震災以後の東京は、さながら私が今日見る広島のように谷崎の眼に映っていたはずである。⁶¹⁾

この中上の物語＝原爆論はそのまま「核時代の大審問官」論として読み替えられる。また中上の『異族』へと至る作家的道程は橋川の「日本民衆の根源に遡行しつつ、それを外へ外へと開かんとする意志」、日本を「アジアへと、世界史へと開いて行こうとするビジョン」も重なるものである。⁶²⁾

つまり中上もまた橋川の言う「何よりも神学の問題であり、正統と異端という古くから魅力と恐怖にみだされた人間信仰の世界にかかわる問題」を「物語」の問題として考え続けていたのだとい

つてよい。核と権力（天皇）をめぐる「大審問官」表象の問いは実は戦後の多くの作家によって問いつけられてきたのではないだろうか。

四 「中動態」と「自由間接主観表現」

——すべてを受け入れる「場」とは何か——

前稿では、「中動態」と原爆表象について議論し、「中動態」における「此者性」が確定記述に回収されない過剰さを含み、そこでの「つねに大量の刺激が等価に意識に上ってきて、しかもそれが意味のまとまりにならないままに、生のデータの感覚に近いものとして意識に浮上する」状態というのが、田中純の「パラタクシス」論——「画面全体の統一が解体されて、各要素が並列的に振動しているような」「言語表現の統語論的綜合や階層的秩序を宙吊りにする」「中絶としての並列」——を援用しながら述べたような被爆者の記憶を想起させるものと論じた。⁶³⁾

また、被爆者の記憶においてはすべての事象が一般化・形式化できない、過剰な「此者性」＝「この」性を帯びたものとして想起されるということの問題化しただけで、そこから栗原貞子の「ヒロシマ」へのこだわりを「広島」という固有名に原爆体験の過剰な「此者性」＝「この」性を帯びさせようとしている「ものである」と前稿で指摘した。

この「中動態」の問題を別の観点と接続させてみたい。それはパゾリーニの「自由間接主観表現」(soggettiva libera indiretta)とドストエフスキーとの関連である。

パゾリーニは「ポエジー」としての映画」のなかで「自由間接主観表現」を「言語そのものにかかわる性質のものではなく、文体にかかわるもの」「すなわち、映画における自由間接主観表現は、その文体に因りて、きわめて柔軟な可能性に恵まれている。」と述べているものである。⁽⁶⁴⁾

それをうけ、ドゥルーズは『シネマ』でおける「自由間接主観表現」を「分離しえない二つの主体化行為を同時に遂行するような、言表行為のアジャンスマン」であり、ここでのイメージは「主観的客観的かという問いはもはや問題ではなく」「半主観的なもの」であると論じている。⁽⁶⁵⁾

山城むつみは、そのドストエフスキー『未成年』論で、『未成年』の前代未聞の手法である「カメラは不透明で物語に内属しており、したがってその撮影行為そのものが物語世界に不可測な擾乱を与えてついに物語を破綻させてしまう」手法を「逆遠近法的切り返し」として分析しているが、その際に山城は「パゾリーニの言う自由間接主観ショット」を援用している。

つまり、「自由間接主観表現」はパゾリーニ的でもありドストエフスキー的でもある表象の在り方と言えるのだが、この「非対称的でまったく異質な世界」⁽⁶⁶⁾を一人の人間の視野の中に同時に出現させることを狙ったパゾリーニの試みを現代文学の中で実践した具体例として、伊藤計劃『ハーモニー』の「生府社会」での一場面をあげることができる。

「生府社会」では自殺者の死の直前の風景が装着していた「拡張用のコンタクトレンズ」に記録され「自殺者主観映像データベース」として閲覧可能になっており、かつそのデータベースを閲覧する霧

慧トアンが「自殺した友人キアンの視野に写る自分自身の顔」を見て衝撃を受けるという場面がある⁽⁶⁷⁾。これは「複数の人間の主観」を「一人の人間の視野の中に同時に出現させ」るためのSF的な技法の駆使の一例であるが、このような「分離しえない二つの主体化行為を同時に遂行するような、言表行為のアジャンスマン」＝「自由間接主観表現」は「他者性」「出来事性」（國分功一郎⁽⁶⁸⁾）を思考し、表象する「中動態」と結びつきうるものだとと言える。

ただ、こうした試みの実践は一つの大きな課題に逢着する。「自由間接主観表現」は他者の視野を自己の視野の中に召還する性質の手法であるがゆえに、それは他者、たとえば虐殺や原爆の死者の視野に映った「自己の姿」までも表象してしまう。これは伊藤計劃『ハーモニー』の実験が示した通りである。そこには死者の苦しみや苦痛までも鮮明に映し出される。ここでの課題とはこうした死者の視座や苦痛までも抱え込むという究極の表象に果たして話者が耐えられるのかということである。

被爆者の記憶を「自由間接主観表現」によつてそのまま自らの主観に移し替えるということは、「中動態」がもたらす過剰な「此者性」＝「この性」を帯びたものとして想起される記憶をそのまま自己の視野の中に差し込むことを意味する。被爆者の、あるいは他の「虐殺」の記憶に開かれるというのは、「画面全体の統一が解体されて、各要素が並列的に振動しているような」「言語表現の統語論的総合や階層的秩序を宙吊りにする」様な状態が常時続くということでもある。

この観点から見れば、杉田が橋川に見出す希望、「日本民衆の根源に遡行しつつ、それを外へ外へと開かんとする意志」の共有は、

橋川が問題化する日本あるいはアジア史上のすべての戦闘に基づく加害と被害の記憶がすべて「複数の人間の主観」＝「一般化・形式化できない、過剰な「此者性」＝「この」性」を帯びたものとして「一人の人間の視野の中に同時に出現」することを意味する。あらゆる他者性と外界の刺激を許容する個体の「此者性」＝「この」性」は、そこに虐殺の加害の表象が紛れ込むことを回避する倫理的基準を持ちえないのであり、この点は哲学者の田口茂が田辺論でデリダとレヴィナスを援用しつつ、「未来と他者に開かれていることは、最善のものと同様、最悪のものにも開かれていることを意味する」⁽⁶⁾と述べておられる。

鵜飼哲がデリダの「コーラ」を評して言う言葉を借りれば、「コーラそのものは決して傷つかない。しかし、何でも受け入れるがゆえに、もつとも醜悪なもの、もつとも傷つけるものがすべてがそこに投下されてくる、そういう場」「この世のあらゆる出来事が叩き込まれる場」⁽⁷⁾を「自由間接主観表現」と「中動態」は到来させる。

五 「神的暴力」から「アンフラマンズ」へ、そして「法外な善」の「解放」「救出」へ

主体がこの状況を支えきるためには、ある種の「倫理」「正義」が必要となる。そうした「倫理」について田口茂の田辺論の別の一節をここで引用しておきたい。

悪に対して自らを閉ざすのではなく、むしろ自らを開くことによつてこそ、一切の予期の地平を突き破る法外な善への希

望が成立する⁽⁷⁾。

「一切の予期の地平を突き破る法外な善」。これを杉田の言う「理不尽な絶滅」へと対置せねばならないだろう。「自由間接主観表現」と「中動態」を連動させることにより、主体は「最悪のもの」の表象を自らのうちに呼び込む可能性を否定できない。しかしそうでなければおそらく「理不尽な絶滅」に立ち向かうことは出来ず、その先にある「法外な善」の可能性へと開かれることもまたできない。

神山陸美は前掲書の中で「大審問官」表象をベンヤミンの「神的暴力」と接続するという興味深い解釈を提出している。

つまり、大審問官とは、人間たちの自由を預かることによつて必然の国を構築する存在に他ならないので、そのような王国を根拠づける規範と法秩序をこそ、ベンヤミンは「神話的暴力」と名づけたのである。だが、「神話的暴力」とは、大審問官の王国をたんに国家として措定し、維持する法的根拠を意味するだけではない。この法の根源には、「運命の冠をかぶった暴力」がかくされていて、この「生死を左右する暴力」を体现する存在として、大審問官が現れるのである。

したがって、大審問官とは徹底的に暴力的存在であつて、だからこそ、法秩序を攪乱する始原的な力として、また、存在そのものを攪乱し、ばらばらに切断することによつて、大地の根源を揺るがす力として現れる。いわば「神的暴力」の体现

者としてあらわれるのである。⁽⁷²⁾

ベンヤミンの「神的暴力」については、『法の力』でのデリダの解釈⁽⁷³⁾以外にも複数の可能性が想定でき、市野川容孝は以下の三つの解釈を提出している。⁽⁷⁴⁾①表象不可能ではあるがアウシュビッツを限りなくその具現に近いとするデリダの解釈、②アガンベンの法権利の脱措定（法に神的暴力を結び付けることはできない）であるとする解釈（剥き出しの生がアウシュビッツで具現したとするなら、それは「神話的暴力」に結び付けられているがゆえに「神的暴力」とは相いれない）、③市野川自身が提出する、ベンヤミンの言う *Entsetzung* に「脱措定」という意味だけでなく、「解放」「救出」という意味を読み取り、そこに新たな法の救出・脱構築を読み込む解釈である。⁽⁷⁵⁾

神的暴力は、神話的な暴力が措定する法律から私たちを解放しながら——その意味で法律を否定しながら——「法権利 *recht*」とは何か、「正義 *gerechtigkeit*」とは何かという問いを、絶えず私たちに再開させるものなのであり、その再開を否応なく、そして有無を言わず私たちに迫るという意味で、それは暴力なのである。⁽⁷⁶⁾

「大審問官」＝「神的暴力」は、一切の救いや希望を許さない表象ではない。「神的暴力は、神話的な暴力が措定する法律から私たちを解放しながら——その意味で法律を否定しながら——「法権利 *recht*」とは何か、「正義 *gerechtigkeit*」とは何かという問いを、

絶えず私たちに再開させるもの」であり、それがキリストの接吻と大審問官の言葉が一对になつていく謂いに他ならない。

ここでもう一つ補助線として引いておきたいのは、ウイトゲンシュタインの哲学である。前稿で森滝市郎の思想を論じる際に、補助線としてウイトゲンシュタインの思想に言及し、世界を言語（命名）を通して治療する「カント的な屈折を受けた経験論」。公共を説きつつ、その影として残り続ける私的言語＝表象しえぬ領域の存在へのまなざし⁽⁷⁷⁾が、森滝の研究対象である17-18世紀のイギリスの言説空間とかさなりあうものであること、ウイトゲンシュタインの『論理哲学論考』が彼の第一次大戦従軍とその時に携帯したトルストイの『要約福音書』、そして同様に愛読していたドストエフスキ―『カラマーゾフの兄弟』に深く影響されていること⁽⁷⁸⁾、さらには寺田俊郎の論によりながらあるアメリカ人哲学者の原子爆弾投下批判⁽⁷⁹⁾でウイトゲンシュタインの高弟であり、『哲学探究』の編者の一人であるガートルード・アンスコムが原爆投下を決断した当時の大統領だったトルーマンを批判した文章を発表したことを論じた⁽⁸⁰⁾。『カラマーゾフの兄弟』のイワン⁽⁸¹⁾の思考（「自己の苦しみが他者にわかるか」という問い）にウイトゲンシュタイン的な発想をかき取る読解は山城むつみが提出しており⁽⁸²⁾、また神山睦美はウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』から『哲学探究』に至る思索に「トートロジ」としての言語そのもの⁽⁸³⁾による「事実の世界を司る強力な権力」（＝大審問官＝神的暴力）が、沈黙する「絶対受動という存在様式」（接吻するキリスト）に捧げられることで「犠牲による救済」が見出されており、彼の「言語ゲーム」論は「規範というものがそなえている相対的なありよう」「どこか希薄な、寄る辺なさ」を表

象しているのだと論じている。⁽⁸⁰⁾

このふたりのウイトゲンシュタイン・ドストエフスキー理解は私が拙稿で論じた「原爆投下以後の世界への視線のありかた、そして私的言語の極北ともいへべき被爆者の沈黙が持つ強さ、尊厳⁽⁸¹⁾」をどのように表象するかという被爆者表象の課題⁽⁸²⁾と重なり合うものである。「大審問官」と「原爆文学」の交錯点は暴力とそれに抗するものとを同時に表象するものでなければならぬ。

此処でさらに付け加えておきたいことは、あらゆる記憶が一般化・形式化できない「此者性」＝「この」性」を帯びて想起されるということは、残酷な暴力をめぐる記憶のみを想起することを意味しないということである。それは戦争で失われたかすかな日常の記憶を手取るように想起すること、その可能性を含んでいる。

マルセル・デュシャンが晩年に書き残した謎めいた言葉、アンフラマンス (inframance) Ⅱ 極薄にインスピレーションを受け、四方田大彦がこの概念について興味深い検討を行っている。⁽⁸³⁾

四方田はそれを単なる物質的な「薄さ」ではなく、「つねに関係のなかで、事物と事物の廻りあいの中で偶然に生じるできごと」と定義し直し（デュシャンは工業製品の鋳型の生み出す製品の差異やずれ違つた人の気配、座席のぬくもりにまで「アンフラマンス」を見出している）たうえて、「うっすらと遺された痕跡」「消滅の一手手前にある映像」にその「アンフラマンス」を見てとる。このうつつすらとした生活の微妙な痕跡、製品の差異やずれ違つた人の気配、座席のぬくもりは、まさしく一般化・形式化できない「此者性」Ⅱ「この」性」を表象しており、また、決して権力に回収できない「規範というものがそなえている相対的なありよう」「どこか希薄

な、寄る辺なさ」でもある。

マルセル・デュシャンとウイトゲンシュタインを接続したときに見えてくる、人々の生活の中に漂う「アンフラマンス」「どこか希薄な、寄る辺なさ」をその「出来事性」も含めて、複数の主観の重なりの中で表象すること。そうした「アンフラマンスな痕跡」を原爆や戦争の残酷な暴力性のただなかに聞き取り描き出すこと。それが「自由間接主観表現」と「中動態」の重なり合いに求められるものである。

「大審問官」Ⅱ「神的暴力」の、神話的な暴力が指定する法律から私たちを解放しつつ、「法権利 recht」とは何か、「正義 gerechtigkeit」とは何かという問いへいかにして開いていくか。その問いの先にこそ「理不尽な絶滅」に立ち向かい、「法外な善」を虐殺の表象の果てに見据えるための術が立ち現れるだろう。

注

1 拙稿「森瀧市郎研究覚書その二——「中動態の哲学」を經由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート——」（『原爆文学研究』

20 2022・3）

2 河出書房新社編集部編『7・8元首相銃撃事件 何が終わり、何が始まったのか？』（河出書房新社 2022）。この論集で杉田俊介が示唆しているように現代版「テロリズム信仰の精神史」が書かれる必要があるだろう。私のテロリズム表象に関する見解としては拙稿「テロルにおける倫理の表象可能性 三島由紀夫の「ドグマティック」」（『三島由紀夫研究』創言社 2010）。「テロリズム・ナショナリズム・ポストコロニアリズムⅡ 文化批評と社会理論の臨界」（『日本学と台湾学』

- 5 2006・9)。
- 3 トーター・ポランツェフ『プーチンのユートピア 21世紀ロシアと「プロパガンダ」(慶応大学出版会 2018)、マリン・カツサ『コールド・ウォー・オールドル覇権を崩壊させるプーチンの資源戦争』(草思社 2015)。
- 4 ロシア(ソ連)の核政策については市川浩『ソ連核開発全史』(ちくま新書 2022)。
- 5 ドストエフスキー 杉里直人訳『詳注版 カラマーゾフの兄弟』(水声社 2020)。日本文学とドストエフスキーについては井桁貞義『ドストエフスキーと日本文学』(教育評論社 2011)。ドストエフスキーの現在の研究状況について亀山郁夫他編『ドストエフスキー 表象とカタストロフィ』(名古屋外国語大学出版会 2021)、『現代思想 2021 年 12 月臨時創刊号 総特集ドストエフスキー 生誕 200 年』。
- 6 神山睦美『希望のエートス 3・11 以後』(思潮社 2013 p344)。神山は『大審問官の政治学』(響文社 2011)『戦争とは何か』(澁標 2022)などの著作で一貫してこの主題を追及している。
- 7 「不可能性の作家」『埴谷雄高全ドストエフスキー論集』(講談社 1979 p136)。
- 8 「大審問官の顔」『埴谷雄高全ドストエフスキー論集』(講談社 1979 p136)。
- 9 「ドストエフスキーの撰取」『埴谷雄高全ドストエフスキー論集』(講談社 1979 p163)。
- 10 荒正人編著『ドストエフスキーの世界』(河出書房新社 1963 p341)。
- 11 高橋誠一郎『堀田善衛とドストエフスキー 大審問官の現代性』(群像社 2021)。堀田については水溜真由美『堀田善衛 乱世を生きる』(ナカニシヤ出版 2019)。
- 12 スターリンと「大審問官」表象について亀山郁夫『大審問官スターリン』(岩波現代文庫 2019)。
- 13 『人間と文学』(『決定版三島由紀夫全集』40 新潮社 p125)。
- 14 『人間と文学』(『決定版三島由紀夫全集』40 p123)。
- 15 橋川文三「中間者の眼」(『三島由紀夫論集成』深夜叢書社 p83 傍線引用者)。なお、神山睦美は『戦争とは何か』のなかで橋川のドストエフスキー理解に小林秀雄のドストエフスキー研究が与えた影響について言及している。『戦争とは何か』(澁標 2022 p132-133)。
- 16 杉田俊介『橋川文三とその浪漫』(河出書房新社 2022 p444)。
- 17 杉田俊介『ドストエフスキー・マルクス・ダーウイン』(『現代思想 2021 年 12 月臨時創刊号 総特集ドストエフスキー 生誕 200 年』)。
- 吉川浩満『理不尽な進化 増補新版』(ちくま文庫 2021)、亀山郁夫『新カラマーゾフの兄弟』(河出書房新社 2015)。吉川浩満『人間の解剖はサル解剖のための鍵である 増補新版』(ちくま文庫)では吉川が『大審問官』に震撼され、それをドーキンス「利己的な遺伝子」と統合しようとした旨が述べられている(p334)。また同書「絶滅とともに哲学は可能か」での大澤真幸・千葉雅也との対話では大澤が「神(キリスト)の死」を「絶滅」に対応(「適応」が「善」)させ、「神が創ったこの世界になぜ悪があるのか、という一神教の問題に対応」(p279)するとしている。この問題は前稿「森瀧市郎研究 覚書その二」での「あらゆる他者性と外界の刺激を許容する個体の「此者性」＝「(イ)性」は、「悪の自由」を解除する倫理的基準

を持ちえなさい」(『原爆文学研究』20 p98) やらに後述する田辺哲学の「法外な善」という問題と対応する。

18 笠井潔『例外社会』第8章「大審問官とアーキテクチャ」(朝日新聞出版 2009 p522)。なお、神山は笠井の解釈を評価しつつその所論を四〇数ページを使って検証している。神山『大審問官の政治学』第二十講〜第二十五講(響文社 2011)。

19 この論点は三島には「大審問官」に該当する問いかけはないとする神山の所論(『大審問官の政治学』p240)に対する反論である。他の文学者や思想家が提出する「キリスト」への問いは三島においては「宇宙人」(『美しい星』)「天人」(『天人五衰』)がそれに該当する。そしてそこでは「本物」と「贋者」が区別できないように語られている(拙稿「三島由紀夫『美しい星』再考——大島渚・吉田大八との比較を中心に」『近代文学試論』58 2020・12)。

当時は、末梢的な心理主義を病んでゐる青年の手をさえ捉えて、くららくこのやうに(「天皇陛下万歳」という遺書…引用者注)書かせるところの、別の大きな手が働いてゐたのではないか。それは国家の強権でもなければ、軍国主義でもない、何か心の中へしみ通つてきて、心の中ですでに一つのフォルムを形成させるところの、もう一つの、次元のちがふ心が、私の中にさへ住んでゐたのではないだらうか。カトリックにおける教会とは、そのやうなものではないか。われわれを代理し、代行し、代表するもう一つの心があるのだ。(『私の遺書』『決定版三島由紀夫全集』34 p155)

「天皇陛下万歳」の遺書を書かせた「力」を三島は「カトリックにおける教会」のアナロジーで説明し、「国家の強権でもなければ、軍国主義でもない」として、それを地上の権力構造から意図的に分離している。

三島のとらえる「教会＝天皇＝大審問官」はこうした複雑な構造を持っている。この点は神山が象徴天皇制との関連で、「大審問官」のビジョン・キリストの接吻を憲法第九条及び第一条に対応させる——を構想する点(神山『日本国憲法と本土決戦』幻戯書房 2019)ともかかわってくる(つまり神山のビジョンのネガが三島の「天皇陛下万歳」の遺書)。神山の議論への違和を示したものととして、岡和田晃による書評(『図書新聞』3392号 2019・3・23)。

20 『小説家の休暇』1955年7月19日の日記(『決定版三島由紀夫全集』

28 p610-614)。

21 『鍵のかかる部屋』(『決定版三島由紀夫全集』19 p261)。

22 東浩紀・大澤真幸『自由を考える』(NHKブックス 2003)。

23 この点について、拙稿「三島由紀夫以後・中上健次以後・伊藤計劃以後」(『層』6号 2016・9)、また岡和田晃『「世界内戦」とわずかな希望』(アトリエサード 2013)。前述の吉川浩満『人間の解剖はサルの解剖のための鍵である』での議論は伊藤計劃以後のSFとの対応で改めて再考が必要であろう(事実同書で、吉川と稲葉振一郎が伊藤計劃に触れており、吉川は伊藤計劃の作品の書評も行っている。p179 p374 p464-471)。思弁的実在論でウィリアム・ホープ・ホジソンを論じた論考として岡和田晃『ウィリアム・ホープ・ホジソンと思弁的実在論』(『世界にあけられた弾痕と、黄昏の原郷——SF・幻想文学・ゲーム論集——』アトリエサード 2017)。

24 杉田俊介『橋川文三とその浪漫』(河出書房新社 2022 p378)。

25 吉本隆明『白熱化した言葉 吉本隆明文学思想講演集』(思潮社

1986 p80 p179)。親鸞を田辺哲学の観点から解釈した論として村村

康彦『哲学を懺悔道として親鸞的に考え直す——懺悔道としての宗教

- 哲学——」(杉原靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房 2021)、『わゆる「死復活」の問題について立花洋佑「田辺元の死と死者の哲学」同『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』。前稿「森瀧市郎研究覚書その二」ではスピノザと田辺元哲学から「中動態」を再解釈する可能性について論じたが、吉本の理論との照応も課題として取り組まなければならぬ。
- 26 三浦雅士『死の視線 八〇年代文学の断面』(福武書店 1988 p272)。
- 27 三浦雅士『死の視線 八〇年代文学の断面』(福武書店 1988 p274)。
- 28 吉本隆明「ファッション」(『重層的な非決定へ』大和書房 1985)。
- 29 神山睦美『吉本隆明論考』(思潮社 1988 p80' p237-239)。
- 30 神山睦美『希望のエートス 3・11以後』(思潮社 2013 p19)。
- 31 吉本隆明「柳田国男論」(『吉本隆明全集』21 p182)。
- 32 吉本隆明『「アンチ・オイディプス」論 ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ批判』(初出『文藝』1986・8 『吉本隆明全集』19)。
- 33 ただし、吉本は実際にはフランス語に堪能であり(「アラゴンへの一視点」(1952・6 初出『大岡山文学』)ではアラゴンの詩に流麗な日本語訳を付けている)決してフランス語原典を参照できないわけではない。このアラゴン論執筆当時の吉本については渡辺和靖「感性と社会の隘路を拓く——1950年代初頭の吉本隆明——」(『愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編』60号 2011)。
- 34 ジル・ドゥルーズ『巽 ライプニッツとバロック』(河出書房新社 1998)。吉本のライプニッツ論は「幾何論」「自然論」(『ハイ・イ
 メージ論Ⅱ ちくま学芸文庫)。吉本を批判した柄谷行人「ライプニッツ症候群——吉本隆明論」(『季刊思潮』NO2 1988)。
- 35 拙稿「森瀧市郎研究覚書その二——「中動態の哲学」を經由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート——」(『原爆文学研究』20 2022・3)。
- 36 ドゥルーズ・ガタリ『ミル・プラトール』(河出書房新社 p303)。なお、Gilles Deleuze Felix Guattari Mille Plateaux (minuit 1980 p321)を参照した。
- 37 マイケル・フリード「ジャクソン・ポロック」(『ART TRACE PRESS』01 2011)。
- 38 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれしていないもの」の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書(その2)——」(『原爆文学研究』12 2013・12)。
- 39 『ミル・プラトール』では「存立平面の記号系は、とりわけ固有名と不定法の動詞、そして不定冠詞や不定代名詞によって構成される」(p303)とされる。
- 40 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれしていないもの」の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書(その2)——」(『原爆文学研究』12 2013・12)。
- 41 〈空隙〉の問題については拙稿「三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3——現代小説を題材に「核」と「内戦」について考える——」(『原爆文学研究』13 2014・12)。
- 42 この点について拙稿「80年代以降の現代文学と批評を巡る若干の諸問題について——三島由紀夫と小林秀雄の亡霊に立ち向かうために——」(西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える』ひつじ

書房 2017・5)。

- 43 『鍵のかかる部屋』(『決定版三島由紀夫全集』19 p239-240)。
- 44 『鍵のかかる部屋』(『決定版三島由紀夫全集』19 p223)
- 45 『鏡子の家』(『決定版三島由紀夫全集』7 p87)。
- 46 『死の分量』(1953・9 初出未詳 決定版三島由紀夫全集28)。
- 47 以下の論述は拙稿「戦略としてのロマン主義記述 江藤淳と橋川文三を中心として」(『三重大学日本語学』2014・6)と部分的に重複してゐる。
- 48 橋川文三「戦争体験」論の意味」初出『現代の発見』第二巻「戦争体験の意味」1959・12 その後『橋川文三著作集』5 筑摩書房 2001 p245。
- 49 橋川文三「戦争体験」論の意味」(『橋川文三著作集』5 筑摩書房 2001 p247)。
- 50 初出『日本の名著』29 藤田東湖』(中央公論社 1974)。その後『橋川文三著作集』10 筑摩書房に所収。
- 51 初出『茨城県史研究』4 1966・3、その後『橋川文三著作集』2 筑摩書房に所収。
- 52 橋川の〈内戦〉の問題については、水戸の内乱の問題に加え、大岡昇平『保成峠』(『文芸春秋』1953・8)、『檜原』(『文芸春秋』1956・1)『天誅組』(1963・11～1964・9『産経新聞』)、安岡章太郎『流離譚』(1982)などと絡めて再検証する必要がある。大岡の歴史小説の端緒を成す『保成峠』が「福島」(福島県郡山市と猪苗代町の間にある母成峠)から始まっていることの意味は福島原発事故を経由した現在からみて別の意味合いを帯びるのである。大岡の『保成峠』を大岡の全文業を貫く主題「敗北と敗走の戦記」が現れたものとし

てセザンヌなどと比較しながら論じた丹生谷貴志「敗走者の生と真理」(『真理』への勇氣』青土社 2011)。

- 53 岡和田晃『世界内戦』とわずかな希望』(アトリエサード 2013)。
- 54 初出「思想の科学」1960・3。テロリズム論と橋川の論との関係については、拙稿「テロリズム・ナショナリズム・ポストコロニアリズム(Ⅱ)——文化批評と社会学論の臨界——」(『日本学と台湾学』(静宜大学 日本語文学系紀要)第5号 2006・9)。
- 55 スピノザと中動態論については國分功一郎「中動態の世界 意志と責任の考古学』(医学書院 2017)、および國分功一郎『スピノザ』(岩波新書 2022)。國分は「中動態」による世界表象としてスピノザの「神」(「自らを刺激し、刺激を受けることができる状態」と生成するという中動態的な過程のなかにある)を、人間の「様態」の本質を「様態の諸部分間の関係を一定の割合で維持しようとする力」＝「「ナトゥス」をあげている(國分『中動態の世界』p234)。
- 56 果嶋遺書編纂会編『世紀の遺書』(講談社 1984)。
- 57 杉田俊介『橋川文三とその浪漫』(河出書房新社 2022 p478)。
- 58 橋川『日本浪漫派批判序説』(講談社学術文庫 1999 p282)。
- 59 橋川前掲書 p207。この点を三島の文化的天皇および「知的概観的世界像」、吉本の詩論および「世界視線」の問題と重ね合わせて考えると、原爆の持つ究極の垂直性＝表象不可能性と情報空間の持つ究極の水平性＝相対性(現在の「大審問官」とはこれらの共犯形態である)が、天皇の持つ垂直性＝超越性・詩の持つ垂直性・喩の持つ水平性＝変換可能性にそれぞれ抵触し、表象を不可能にするということになるだろう。橋川の「抽象性」、三島の『鏡子の家』以降の作品、吉本の「世界視線」は、いかにこうした事態に抗するかを思考

した結果なのであろう。原爆詩においては、いかに究極の垂直性と究極の水平性から被爆表象の「単独性」＝「此者性」を維持するかが課題となる。また「無限の過去と無限の未来」という吉本の「世界視線」の設定は、「未来の他者は存在しない」という設定のもとで「倫理的」「利他的でありうることは可能か」（前掲「絶滅とともに哲学は可能か」での大澤真幸・千葉雅也の発言 p287-288）と、さらに拙稿で論じた「爆心地の黒焦げの死者の傍らで倫理的な尊厳と代理の言葉を説く」ことから「倫理性の発動を完全に無効化する破局を前にして行われる他者との連帯の可能性へとつなげる」と（ムーゼルマン）の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か——「現代詩論史」の視角から吉本隆明『「反核」異論』を読む——（『原爆文学研究』18 2019・12）という問題設定にもつながりうるものである。

- 60 この点について宮嶋繁明『橋川文三 日本浪漫派の精神』弦書房（2014）、実父小林利夫と一高時代の同級生だった橋川との交流を描いた小林恭二『父』（新潮文庫 1999）、橋川と弟敏男との関係を「生者と死者をともに包摂する『ぼくら』の像」としてとらえた田中純「半存在という種族 橋川文三と『歴史』（『過去に触れる——歴史経験・写真・サスペンス——』羽鳥書店 2016）。
- 61 中上健次「物語の系譜 谷崎潤一郎」（初出『国文学』1979年3月号 『風景の向うへ』冬樹社 1990 p123 傍線引用者）。
- 62 晩年の中上に対する私の見解としては拙稿「三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3——現代小説を題材に「核」と「内戦」について考える——」（『原爆文学研究』13 2014・12）。
- 63 田中純前掲『過去に触れる』p260。およびテオドル・W・アドルノ

「パタクシス」（『文学ノート2』みずが書房 2009）。

64 パゾリーニ「ボエジーとしての映画」（岩本憲児・波多野哲朗編『映画理論集成』フィルムアート社 1982）。

65 シル・ドゥルーズ『シネマー 運動イメージ』第5章「知覚イメージ」

（法政大学出版局 2008 p127-136）。ドゥルーズにおける「自由間接話法」の重要性について、國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』（岩波現代全書 2013）。

66 山城むつみ『ドストエフスキー』（講談社 2010 p423）。

67 伊藤計劃『ハーモニー』（ハヤカワ文庫JA 2014）。

68 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』（医学書院 2017）。

69 田口茂『希望のアナクロニズム 田辺哲学における「還相」の時間的構造』（杉原靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房 2020）。

70 鶴飼哲・長原豊「遺産相続」（『現代思想 緊急特集 ジャック・デリダ』青土社 2004・12）。

71 田口茂『希望のアナクロニズム 田辺哲学における「還相」の時間的構造』（前掲『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』2021 p255 傍線引用者）。

72 神山陸美『希望のエートス 3・11以後』（思潮社 2013 p148-149）。

73 デリダ『法の力』（法政大学出版会 1999）および早川誠による書評「書評 ジャック・デリダ『法の力』（『思想』2000・7）

74 この問題を戦後文化のスピリチュアル表象とともに論じたものとして拙稿「脱指定＝解放されるスピリチュアリティ——三・一一以後のポスト・ベンヤミンの星座＝記号配置——」（『原爆文学研究』17 2018

・12)

- 75 市野川容孝『法権利の救出 ベンヤミン再読』（『現代思想 特集 アガンベン』2006・5 p122-123）。
- 76 市野川容孝『法権利の救出 ベンヤミン再読』（『現代思想 特集 アガンベン』2006・5 p124）。
- 77 マクギネス『評伝ワイトゲンシュタイン』（法政大学出版局 2016）、鬼界彰夫『ワイトゲンシュタインはこう考えた』（講談社現代新書 2003）、『ワイトゲンシュタイン』秘密の日記』 第一次世界大戦と『論理哲学論考』（春秋社 2016）。前述の「絶滅とともに哲学は可能か」で千葉雅也はメイヤサー『有限性の後で』が提起した問題を「ある因果性の作動するゲームの空間とそれに対する余剰」としてとらえ、それをワイトゲンシュタインの「言語ゲーム」に関係づけようとする（p281-282）。
- 78 寺田俊郎『あるアメリカ人哲学者の原子爆弾投下批判』『プライム』（明治学院大学平和国際研究所 31号 2010・3）。言及されているのは G・E・M・Ancombe Mr. Truman's Degree Ethics, Religion and politics Blackwell 1981、ジモン・ロールズ『原爆投下は何故不正なのか』（『世界』1995・2 川本隆史訳）、トーマス・ネーゲル『戦争と大虐殺』（『コウモリであることはどんなことか』勁草書房 1989）。
- 79 山城むつみ『ドストエフスキー』（講談社 2010 p494）。
- 80 神山睦美『大審問官の政治学』（響文社 2011 p255—260）。
- 81 シンポジウム『原爆をどのように語りうるか 原爆を描くこと』受容する（こころをめぐって）での私の発言（『原爆文学研究』増刊号 2006・3 p44）。
- 82 拙稿『森瀧市郎研究覚書——バトラール研究と日本倫理思想との比較を中心に——』（『原爆文学研究』19 2020・12）
- 83 四方田犬彦『磨滅の賦』（筑摩書房 2003 p156）。この論点について拙稿『三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3——現代小説を題材に「核」と「内戦」について考える——』（『原爆文学研究』13 2014・12）、拙稿『80年代以降の現代文学と批評を巡る若干の諸問題について——三島由紀夫と小林秀雄の亡霊に立ち向かうために——』（西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える』ひつじ書房 2017・5）